

認知症の人らが「洗濯工房」

宇治のセンター

認知症の人たちが京都認知症総合センター(宇治市宇治)で、病院の入院患者や福祉施設の高齢者が出した衣類の洗濯業務を請け負っている。社会参加や就労の場を提供する市の「認知症初期支援プログラム」の一環で、参加者は丁寧に手際よく作業をこなしている。

病院・福祉施設から請け負い

同プログラムは、同センター内 た活動のほか、企業などから注文の常設型認知症カフェ「ほづおう」を受けて木工品を作る工房もある。を拠点に2019年に始めた。卓る。洗濯業務は、清掃・クリーニン



京都認知症総合センターの「洗濯工房」で、衣類を折り畳む作業をこなす認知症の男性(宇治市宇治)

社会参加や就労支援 衣類折り畳み励む

グ業のアグティ(久御山町森)と提携した取り組み。同社は認知症の当事者に限らず、障害者や高齢者などさまざまな立場の人に仕事を提供し、社会参加を促す支援活動を行っている。

同センターでは今年5月に「洗濯工房」の名称でスタートし、月2回の活動日を設けている。参加者は洗濯した後の衣類を折り畳む業務を担い、賃金も支払われている。

今月11日には当事者とその家族、支援スタッフの8人が作業に励んだ。洗濯ネットからTシャツやスポンなどを取り出し、作業台の上で折り畳んだ後、きれいに重ねてビニールの袋で包んでいった。

参加した当事者の女性(75)「宇治市にはてきぱきと手を動かしながら、「人の役に立ててやりがいがある。丁寧にミスがないよう心がけている」と笑顔だった。アグティの齊藤徹社長(45)は「機械化できない作業をお願いしている。この仕事を通じて社会や地域の中での役割を感じてもらえれば」と話す。

同センターの担当者は「和気あいあいとした雰囲気です。当事者が参加しやすく働きやすい場になってきた」と、取り組みに手応えを感じている。

(本好治央)